

我々の労働組合を結成しよう

『労働組合結成に向けて』 京都労働運動研究会

我々労働者として、取巻は目下だいたいこのところには止業がつくす「つくやねば」苦痛を身動きのきかない所になって来ている。資本主義企業には言いたいことも言えず、自分を殺さねばならない。また、労働者の組織であるはずの労働組合が行う斗争(春闘)は、いつも労働者になんともやるきれない気持ちを感じさせている。

我々が争いをすれば、時間内集会には資金カッとながやられ、スライキ体制は圧力以外の向ものでもない。休暇に対して取制によるチエク、強いては我々の生活全体に対しての干渉などが、資本により、当然の如く行なわれ続けている。賃上げも団体交渉という片使強が台座二年分の賃上げを決めるだけである。では、いまの労働組合は何故これに対して争えないのか！

毎年の春闘の賃上げ(合理化とひきかえの斗争のためにだけ労働組合があるのか！斗争時以外は我々労働者は「や」ったるで杜撰「そ」こかないのか！ 争うではないはずだ。我々は斗争のなかに何かを求めよう。どこにいてもやりきれないこの現実を斗争の中へ変るかもこれがないと……。

我々労働者は資本主義企業なくとも生きるものが出来る。我々労働者の使命は新しい社会を生かすことである。

ただ今に、総評など既成の労働組合においてこの「つくやねば」とはいつ。だが「一石田を

生々とした労働者の斗いを取り組み得ないのだろうか。それは明らかである。現在の労働組合が自主的組織ではなく、企業に資本に保属した従業員組織であるからである。現在、全世界の先進国の労働者に分けられてきている帝国主義的抑圧・支配に対して斗い得ない組織であるからである。いかにすれば『利益(賃上げ)を奪取するためにだけ有効な組織なのである。我々に対してこの抑圧・支配は賃上げの抑制・諸権利の無視といっただけではなく、思想・行動のチェックなど、生活・行動全体にかけられて来ているのである。現在、日戦青年を員会に結集する青年労働者の斗いが、我々の求める斗いとして登場してくる。その闘いを結集する。資本に依りなく、労働組合の対応をしても斗いの弾圧としてある。この事実を明らかにしよう。我々労働者の斗いに対する弾圧をどのくらい強固にばらばら配を打

破し、労働者の諸権利・賃上げを獲得するに
とんでまなむことを、私たちが京都労働運動研
究会は、はっきりと断言した。

私たちが京都労研は、反戦青年委員会に結集
する青年労働者のヨロイ政治斗争が、日本
の労働運動に画期的なものを生み出し、たつ
そい女少数であるにもかかわらず、今までの
とんな労働者のヨロイよりもより強固なもの
なっていることを見た。そしてまた、それが
労働者の自主的・意識的な集団として、企業
産別のゆくをこえた地域的な結果としてある
ことを探り出した。

昨年十一月の争は、私たちが労働者の
一定の敗北としてあつたことを総括する中で、
労働者のヨロイが、全社会的なものとしてなけ
ればならぬこと、真の意味でマルシヨアジ
ー全体に対するヨロイ・帝国主義打倒のヨロイと
してない限り、私たちのヨロイはまたもや敗
北させられてしまうことになるであらう。

私たちが労働者は、現在のメニマヤまな形をと
つてあらわれようとしている、七〇年代の帝国主
義の復讐体制確立に向けての労働者に対する
取巻、街頭での抑圧・支配を打ち破らねばな
らぬ。

私たちが京都労研は、現在の労働組合が労働
組合であり、労働者のヨロイを有効に、道徳
的に取り組みえない組織としてあること、そ
して、現在の帝国主義的な労働運動の指圖に
ならんを対抗しえないものとしてある以上、新
たな労働者の自主的な組織を作らねばなら
ぬといふことを呼びかける。

これまでの反戦青年委員会への運動の強化
をはかられた。はなはだしいこと、確信するとい
時、生産現場をめぐり、形や大さき、
所の差異はあれ、労働者の階級的な斗争の
断固すい抜く労働者の自主的組織を作る
く、すべての頭をさげている労働者に呼びか
ける。

全ての労働者に労働者のヨロイ組織を
労働組合を建設するといふことを呼びかける。

京都労働運動 研究会